

幽玄

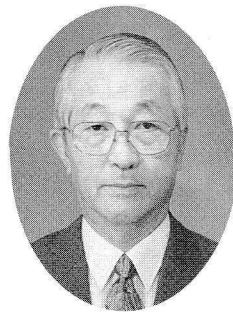
題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.41

平成23年3月26日

「花のある生き方」を目指して



会長 藤本 圭佑

皆様のご協力を戴き平成22年度連盟行事をなんとか無事に執行することができ、心よりお礼を申し上げます。

この間、いくつかの課題も見えてきましたので今後解決に向けて努めてまいります。

さて、この数年間の世相を、漢字一文字で回想すると、2004年の「災」に始まり、05年「愛」、06年「命」、07年「偽」、08年「変」、09年「新」、10年「暑」と続き、自然界の異常気象や社会経済問題を表すものが多く見受けられます。

殺伐な事件、高齢者の所在不明、先の見えない経済不況そして信頼の揺らぐ政治と社会情勢

が混沌とする中で、僅かにタイガーマスク運動が、かのシュリマンを驚かせた「美しき日本人」らしい心温まる話題でありました。

総じて日本はいま、世阿弥の言う「女時^{めとき}」の只中にいるのかも知れません。「男時^{おとき}」は、GDP世界第2位になった中国、経済躍進著しいインドなどの新興国にあるようです。

前に読んだことのある木村尚三郎先生（東大名誉教授）の言葉をお借りすれば、「男時」は、能力があれば何をやっても巧く行く。これに対して「女時」には、自己を磨き「花のある生き方」に目を向け、「調和と連帯

「友達関係」を重んずれば全体として美しくまとまり自分も美しくなる」つまり「花」を身につけ「和の心」を養うときのようなのです。私達もこのような「花のある生き方」を目指したいものではあります。

趣味は何かと聞かれ、「謡」

と答えてすぐに判る人は残念ながら少ないようです。

一瞬要領を得ない顔をする人が最も多く、次が「もしかして詩吟？」と違ったものをイメーヂする人、シヨックなのはお経と間違えられた例。いずれにせよ「謡」を得心してもらうまでにてこずることがよくあります。これは社会が複雑多様化し、能楽を愛好する人が少なくなっているせいかもしれません。

作家藤沢修平の世界では、江戸の昔、道を歩いていてどこからともなく、謡の声が聞こえてくる、そのような「音の風景」が描かれています。いまそれを期待することは出来ませんが、「謡・仕舞」は私達素人にも教養や趣味として楽しめる、かけがえのない古典芸能であることは紛れもない事実です。

能楽がユネスコの「世界無形文化遺産」に指定され、21世紀は文化の時代、ものの豊かさから心の豊かさへの時代であると言われています。

日本の誇る伝統文化をなんとかして未来に繋げなければならぬ、そのために私達能楽愛好者が、多くの人の共感が得られるよう地道な草の根の普及活動に取り組みとともに、若い世代、とりわけ学校教育に取り入れられるよう働きかけることが重要

であると考えています。

連盟報告(平成23年度前期)

企画事業担当 鈴木 力雄

一、連盟主催の能会は、次の通りでした。

①これまで秋に開催してきた横浜能楽堂と共催の「横浜能」は、今年度から春に開催することになりました。

これは西区実行委員会による「かもん山能」が昨年より横浜能楽堂と共催となったことにより、能楽堂が共催する2大能会として、開催時期を春と秋に分けることとしたことによるものであります。

これに伴い第58回横浜能は、平成22年6月4日(土)に宝生流「弱法師」、狂言大蔵流「花子」で開催されました。入場券販売数470枚、入場者数451名、来場率92.4%でありました。(来場率＝入場者数/能楽堂座席数(486))

②第26回横浜五流能楽大会は、平成22年9月11日(土)、当番幹事観世流により開催しました。(別稿大会報告参照)
③第14回五流のつどいは、平成23年2月19日(土)、当番幹事喜多流・(観)海謡会共同

で開催しました。(別稿つどい報告参照)

二、会員数

平成22年4月1日現在の会員数は509名(個人453、団体企業56)で前年度比過去5年間最多の16名減(個人15減、団体・企業1減)となりました。(平成22年度定期総会資料参照)
過去5年間の会員増減を前年度比で見ると、18年度が5名増、19年度が1名減、20年度が5名増、21年度が22名減、22年度が16名減と、増減を繰り返すというものの、増に対し大幅な減少が続く、特に22年度は2年連続の減少に加えて減少人数が最多となりました。

素人同好会の会員減少は全国的な趨勢のようですが、何とか少なくとも現状を維持できるよう、現会員はじめ皆様の特段のご努力をお願いする次第です。

(注) 22年度総会資料訂正

とお詫び

「資料2」の「3、組織広報活動」の1)の会員数年月日(平成21年4月1日現在)とあるのは(平成22年4月1日現在の誤りでした。

第26回横浜五流能楽大会報告

観世流 鈴木 力雄

横浜能楽連盟主催行事である第26回横浜五流能楽大会は、平成22年9月11日(土)、午前9時45分開演、午後5時30分終了、計465分の興業予定で開催しました。

出演番数は、素謡15、仕舞11、舞囃子1、独吟2、連吟3、独鼓2、一調2、計36番で、出演者は延べ約300名でした。

一、時間経過の内容

・出演番数36番の舞台入場から退場までの実演能時間は440分でした。

・申込時間通りの演能が9番、申込時間を超過した演能が8番、16分、申込時間に満たない演能が19番、44分でした。

・主催者挨拶の時間が、予定5分に對し8分でしたので、演能時間合計は差し引き25分早く進行しました。

・他方、前の出演者退場から次の出演者入場までの舞台入場に要した時間(ロスタイム)は、0分が14番、1分が18番、2分が3番、3分が1番で、総計27分でした。

・舞台への入場時間(ロスタイム)27分は、早く進行した演能時間25分で補われ、終了予定時間に対し2分遅れにとどまり、大会は滞りなく順調に終了できました。

二、検討事項

①4月の総会で理事の大幅な改選があり、大会本部に詰める理事が不在となる状態があつて、来場者にご迷惑をかけました。今後は本部に必ず理事1名以上が詰めるように理事会で申し合わせました。

②更衣室の流派分けをしないことから、茶菓の用意を楽屋、研修室、大会本部の3ヶ所といたしました。4部屋ある研修室は中央を壁で仕切つてあることから、今後茶菓の用意は、研修室を1ヶ所増やして、計4ヶ所といたします。

③和服に着替えた場合など足袋のまま土足の部分を歩き、そのまま廊下や舞台上に上る方が見受けられました。スリッパが不足していることもあり、特に第2舞台を使用の場合などには、各自スリッパを持参するようお願いいたします。

「第14回五流交流のつどい」を終えて

喜多流 中村佐千夫

平成23年2月19日(土)、横浜能楽連盟主催の「第14回五流交流のつどい」が開催されました。

今年は喜多流と(観)海謡会が

当番幹事を担当しました。何かと行き届かぬ点多かったと存じますが、各流派の責任者の方々やご出演の皆様のご協力により無事終了することが出来ました。関係各位に心よりお礼申し上げます。

今回は素謡18番、連吟4番、仕舞7番、独鼓3番、全32番の演目と、延262人の方々が出演されました。

開演は午前9時42分、素謡「鞍馬天狗」から、終演の素謡「羽衣」附祝言「千秋楽」まで7時間44分にわたり、平素からの精進のほどをご披露いただきました。有難うございました。

ところで、当番幹事のお役が回つてくるとまず最初に頭を悩ますのは、めくりの作成でした。今回は能楽連盟専用のめくりを作成することが決まりましたので、大変気が楽になりました。

このめくりは今後の能楽連盟の大会で使い回しをしてゆくことになり、新規の曲目はその都度補充してゆけば、いずれはただ並び替えることだけで済むことになるでしょう。

また、過去にいろいろトラブルがありました駐車場の利用について、事前申請制度の新しいルールが作られ、皆様のご協力と相まってスムーズな運営が出来ました。

出来ました。

最後に、能楽大会の運営ノウハウは、当番幹事持ち回り方式のため、個々の流派内に蓄積されています。折角の知恵を引き継ぐためにも、今回作成した資料や掲示物等は電子データとして保存し、次の幹事さんの参考にあ資したいと考えています。

「守・破・離」のこと

観世流 畠山 利子

書家である知人が「守・破・離」という言葉が気になつて

いるという。どういうことかと訊ねると「習う」は「倣う」だから、どうしても「守」だけで終わってしまう人が多い。「破・離」までは届かない。そのところをどうしたらいいのか。そして、「この言葉は主に武道や伝統芸能の世界で使われているのだけれど、世阿弥が言ったといわれている」と言い添えた。

世阿弥と聞いて、私は内心慌てた。「序・破・急」は周知のものだが、「守・破・離」は知らなかった。私はすぐに『風姿花伝』や『花鏡』『至花道』等の頁を繰ってみた。見つからない。焦った。

そこでインターネットを開く。「守・破・離」で調べると、出てくる、出てくる。茶道や武道

の世界だけでなく、企業経営や人材育成の項にも、この言葉が並んでいる。

すなわち「守」とはひたすら師の教えを守り学ぶこと(基本)。「破」とは教えの言葉から抜け出し、自分なりに工夫して発展させること(応用)。そして「離」とは型に捉われず、自在の境地に入ること(独自性)だという。

世阿弥が直接言った言葉ではないが、根本のところでは関係があるといえる。能を極めた世阿弥の存在そのものを表しているのかも知れない。

私は謡を始めて15年、ひたすら師の謡を真似しよう、真似しようとなつてゐる。今までも「守」の次元のままで、それで「よし」としてきた。

しかし、昨年9月の五流の会で「井筒」のシテをやらせていただいた時、その練習の場で、ただ真似をしているだけでは少しも進歩のないことを知らされた。「守」が90%占める中にも、声の出し方やシテの心持ちなど、今の自分のできる中での工夫や考察が必要であることを痛切に感じた。

弟子たちに「破・離」の道程を示唆したいと思う、知人の気持ちは貴重だが、それは、個人が学ぶ中で自分で会得していくものなのであろう。

私にとって「破」への境地はまだまだ遠い道のりで、それこそ「守」で終わってしまいそうだが、今を楽しみながら学んでいきたいと思う昨今である。

思いのまま

観世流 前島 幸子
梅若会

私には、今でもとても大切にしている思い出がある。それは、まだ謡や仕舞などを習って間がない頃、ある能楽堂で、梅若六郎先生の「清経」のお能を拝見した時の事である。その姿はただただ美しく、今でも鮮明に脳裏に焼きつき、いつも鮮やかに舞われている姿が浮かんでくる。

それは表面的な美ではなく、奥深い内面的な美というのだろうか。「秘する美」なのである。世阿弥の風姿花伝には「秘すれば花、秘さざれば花なるべからず」とあるように、まことの花とは、心の中に咲く花のことなのだろうか、観る側も、演ずる側も、微かで深い神秘の空間にいざなわれて、一時を共有するのである。

隠すことが花であり、あからさまにしての花は花ではないのだろう。その美しい花を観る感性が備わり、感動の思いが波のごとく押しよせる。このような大切な思いを多く、これから

持ち続けたい。

美しい舞台は、あくまでも演者の創造でしかないが、観る方も自由に想像し感動し、そういう感性をみがきたいと思う。

感性はつまり「心」なのである。難しい事は訳らないが、「心」を感じる感性は、持つて生まれた資質、良い環境、そして良い先生に恵まれる事ではないだろうか。そこからおのずとその人の人格が、品位が出来てくるような気がする。品性の良い舞台を観ると、心がすがすがしくなってくるのである。

品性とは、教えられて学ぶものではなく、日常の心のあり方なのではないだろうか。沢山のすばらしいお能を観て、秘する花（まことの花）をそして感動を心の中に蓄積してゆきたい。しかしそのように思っているにもかかわらずそのチャンスが無いのが現状である。

十分な条件が備わって、その時こそ素晴らしいお能に出会えるのだろうか。思えば一段と高まって来ている。

謡曲と百人一首

金春流 武極 邦子

今年も新年恒例の「歌会始」の儀がテレビで放映された。お題は「葉」。実にいろいろ

な葉が古式ゆかしい節回しで詠じられていた。私にとってお正月の歌といえば百人一首だ。毎晩の様に家族と遊び、成長してからは親戚・知人の家を往き来した。遊び終わるとお夜食が出され、それがまた楽しみだった。丁度百人一首を覚え始めた頃、お謡と仕舞の手ほどきを受け始めた。新年の謡初めに「羽衣」を習っており、クセのところを「ここもたえなり天つ風 雲の通路 吹きとじよ 乙女の姿し ばしとどまり」とあるではないか。最初に覚えた歌だった。

その後も実にいろいろな曲で見つけ、松風の「立別れ 稲葉の山の 峰に生ふる……」。鉢の木「薪の段」「切りくべてみ垣守、衛士炊く火は……」等多くの曲に挿入されていて、お謡に親しみを覚えた。

出身地越後長岡は明治の頃から櫻間左陣、弓川、金太郎師父子が三代にわたり指導に来岡され珍しく金春流が盛んな所である。当時は三日間連続で、夜は全員一緒に一番謡うお稽古だった。戦後の事で旅館も復興しておらず、3・4年の間は戦災を免れた熊倉吉之助宅（義妹の父）の離れ屋敷が弓川師のお宿、お稽古の会場だった。

弓川師は早起きで、夏などは5時頃には起きられて布団の上

に正座し、手拍子を取りながら低い声で謡っていらしたらしい。朝食の後、お稽古の方々が見えるまでの二時間程「吉之助さん一番謡いましょう」とおっしゃって、一対一のお稽古をして頂いたそうで、それは厳しいもので三日間稽古を付けて頂いてもせいぜい6・8頁進むのが一杯だったと、吉之助氏は遺稿に書いておられる。私はその頃子供だったので仕舞が主だった。晩年に近い弓川師の謡は、洪い声で節をたつぷりと謡われ、今でも耳に残っている。

龍馬（後の金太郎）先生は30代半ば頃で朗々とよく響く謡だった。仕舞のお稽古では手を取られて、ただくるくる舞わされ、分からないうちに終わってしまった。

長岡で催される演能会にも必



ず行った。内容など分るはずもないのに、謡の節回し、笛の旋律にうつとり、お囃子の掛声、テンポのよい太鼓、大小鼓が面白くて観ていたのかも知れない。結婚で横浜に住み、お稽古は中断、観能も稀になった。数十年後久良岐教室を知り、守屋泰利先生に教えて頂く事になった。良きお仲間に出会えて楽しくお稽古しているこのごろである。

能との馴初め

喜多流 栗野 稔

毎年新年には神社などに参詣し「今年こそは……」と新しい自分への挑戦の気持ちで新たにする訳ですが、皆様はどんな新年を迎えられたのでしょうか。

私はこの4月、厳島神社御神能に出演が決まり、稽古の真つ最中。「なうこの衣はこなたの衣にて候何しに、召され候ぞ」シテが幕内より発する「羽衣」の第一声である。懸命に覚え、覚えたはずがまた忘れ、いよいよ来るべき物が来たかとの恐怖と戦いながら、テープレコーダーと格闘の正月を過ごしました。私と能との出会いは、今からもう十数年前。長年のサラリーマン生活を終え、自由の身になったものの第一に困ったことは、朝起きて何もすることがない。

女房の方はすっかりスケジュー
ルが決まっています、元氣よく
「行って来ます」。スポーツジ
ムにせつせと通ったり、家の近く
更には鎌倉近辺のお寺を訪ねた
りして、何となく日々を送って
いた時でした。確か「市」の広
報だったと思いますが、横浜能
楽堂で「みんなで謡う高砂」の
ワークシヨップが開かれるのを
知り、参加することにしたのが
始まりです。

第一回目の教室の日、能楽堂
の見所はもう満員で、ワキ正面
の後の空席を見つけて着席しま
した。山崎館長から「音痴は関
係ない、大きい声で謡えばよ
い」との主旨の励ましのお話を
聞き、やや安心しました。切戸
口から先生（喜多流シテ方、出
雲康雅師）が登場、正中に一人
座られて、いよいよ稽古が始ま
りました。その第一声に度胆
を抜かれました。高砂の祝言小
謡「所は高砂の……」。マイクも
無い肉声はピンピン響いて完全
に圧倒されました。翌年も同じ
教室が開かれ、再び参加し、終
了後、躊躇なく弟子入りを申し
込みました。高砂紅葉会は、そ
の時に一緒に始めた仲間達と付け
た名です。

以来十年以上、謡から仕舞、
小鼓と稽古の幅を広げて今日に

至っています。レベルの方は
さっぱり。先生には勿論、ご近
所にも悪声を発して、迷惑を掛
けながらも稽古は続けています。
そんな折、先生から「もう一度
舞台に出ないか」のお話があり、
この幸運逃がすべからずとお引
き受けした次第です。

厳島神社桃花祭御神能は、古
くは永禄11年（1568年）に
始まったそうですが、現在の形
になったのは明治になってから。
春の大宮祭を桃花祭とし、毎年
4月16日から18日までの3日間、
御神能として「翁」から始まっ
て五番能が演ぜられています。

昔風の数え年ではもう「喜の
字」。衰える脳味噌を絞りつつ
「南無帰命月天子、本地大勢至」
と悪声を発しながら「序の舞」
の稽古に励んでいます。

4月16日にお暇がありました
ら、是非お運び頂けたら幸いで
す。果たして、日頃の稽古の成
果を発揮し、見事「天女」にな
れますか、見てのお楽しみと言
った処です。

能楽堂より

二十三年五月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり
公演を開催いたします。このほ
か毎月第2日曜日に「横浜能楽

堂普及公演「横浜狂言堂」を
開催いたします。
第五十九回横浜能

六月四日（土） 午後二時開演
狂言「簀屑」（和泉流）野村万作
能「千手 邪曲之舞」（観世流）

梅若玄祥・梅若長左衛門
チケット発売日
四月九日（土）正午から

（初日は電話・Webのみ）
S席四千元、A席三千五百円、
B席三千元

**開館十五周年・山崎有一郎館長
白壽記念企画公演**
「祝いの型 江戸と首里」

第一日目
「江戸の祝い」
六月十八日（土） 午後二時開演

「翁」（観世流）
観世喜之・山本東次郎
能「江野島道者」（観世流）

S席九千元、A席七千五百円、
B席六千元

第二日目
「首里の祝い」
六月十九日（日） 午後二時開演

独唱「赤田風節」 照喜名朝一
独唱「仲村渠節」 城間徳太郎
組踊「花売の縁」 島袋光晴・

宮城能鳳・親泊久玄、他
S席六千元、A席五千元、
B席四千元

チケット発売日

四月十六日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）
普及公演

「夏休み親子能楽ワンダーランド」
七月三十一日（日）
第一部 午前十時半開演

第二部 午後二時開演
第一部 体験しよう！
能・狂言の動きや能の楽器が

体験できます。
第一部体験チケット五百円
※親子でご参加ください。

第二部 みてみよう！
狂言「柿山伏」（大蔵流）
山本則重

能「小鍛冶黒頭」（観世流）
武田宗典

チケット発売日
五月七日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）

おとな／S席四千元、
A席三千五百円、B席三千元
こども／千五百円（第一部体
験チケット付き）

同伴する保護者はこどもと同
数まで千円引き
※お子様のお席をお求めにな
らない場合は適用されませ
ん。

特別公演
八月二十一日（日）午後二時開演
狂言「無布施経」（和泉流）

能「野宮」（喜多流） 野村 萬
塩津哲生

チケット発売日

六月十一日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）
S席七千元、A席六千元、
B席五千元
お問い合わせ・お申し込みは、
☎〇四五（二六三）三〇五五まで。

《編集後記》

△このたびの東北地方太平洋沖
大地震により被害を受けられま
した皆様には、謹んでお見舞い申
し上げます。一日も早い復旧を
心よりお祈り申し上げます。

△幽玄第40号において「隅田川
・班女……シテは同一人物」を
執筆して頂いた観世流梅若会
の菊田博様の名前を菊池博様と誤
記しました。お詫びして訂正い
たします。

△「幽玄第40号」まで編集委員
を勤められていた観世流室屋澄
雄および金春流澤田英雄、両氏
が退かれ、『幽玄第41号』からは
観世流佐野友有および金春流水
野次郎、両氏にお願いすること
になりました。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒247-0014 横浜市区公田一九〇―五
藤本方
FAX 〇四五―八九二―六三六二
◎電話の場合 横浜能楽堂
TEL 〇四五―二六三―三〇五〇